

吉阪隆正の住宅・都市理念に関する研究

主査 倉方 俊輔*¹

委員 山名 善之*²

都市デザインを専攻し、ル・コルビュジエのアトリエで学んだ吉阪隆正（1917-80）は、とりわけ住宅と都市の分野において、現在も考慮に値する数々の成果を生み出した。本研究では、彼の住宅・都市理念の形成過程と特質を、旧蔵資料や論考に基づいて検討した。その結果、終戦前に獲得していた「建築地理学」の方向性が、戦後の幅広い研究交流を糧に独自の「住居学」に結実し、留学中のル・コルビュジエとの出会いが彼と「住居学」の読み替えをもたらした過程が明らかになった。また、それらの総合としての吉阪の住宅・都市の理念が、人間の行動を中心に「住居」の延長として「都市」を捉えることなど、7項目の顕著な特質を持つことが判明した。

キーワード： 1) 住居学, 2) 都市計画, 3) 地理学, 4) 第二次世界大戦, 5) 戦後復興
6) ル・コルビュジエ, 7) 今和次郎, 8) 石川栄耀, 9) 秀島乾, 10) 丹下健三

TAKAMASA YOSHIZAKA'S IDEAS OF HOUSING AND CITY PLANNING

Ch. Shunsuke Kurakata

Mem. Yoshiyuki Yamana

This paper is written with the aim of clarifying the formation process of Takamasa Yoshizaka's ideas of housing and city planning and characteristics of them. Takamasa Yoshizaka (1917-80) was an architect who worked in the atelier of Le Corbusier from 1950 to 1952. As a result, two points were made clear. One is that the foundation for his later ideas and activities were formed from his university years to 1952, by gradually adopting the social architectural trend of thought at the time. The other is that his ideas of housing and city planning have seven salient characteristics.

1 はじめに

1.1 研究の目的

吉阪隆正（1917-80）の名は、ル・コルビュジエの弟子として有名である。早稲田大学理工学部建築学科助教授に在任中の1950-52年に、フランス政府給費留学生としてパリのル・コルビュジエのアトリエに留学。帰国後の1955年に設計組織である「吉阪研究室」（1964年以降「U研究室」）を設立し、自邸（1955）、浦邸（1956）、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館（1956）、ヴィラ・クウクウ（1957）、アテネ・フランセ（1962）、大学セミナー・ハウス（1965）といった話題作を世に送り出した。大学では意匠や都市計画の講義を担当し、1966年からは新設された大学院都市計画コースの所属となって、大島計画（1965-69）、二一世紀の日本（1970）、都市計画学会賞を受けた仙台計画（1973）をはじめとした都市デザインを指揮した。「不連続統一体」（1957）や「有形学」（1963）概念の提唱でも知られ、日本建築学会会長（1973-74）などの要職も務めた。

多岐にわたる活動の中心に一貫して住宅と都市への取り組みがあり、その始まりがル・コルビュジエとの出会

い以前に遡ることは、これまでも指摘されている²¹⁻⁴⁾。留学前の住宅と都市に対する思想と行動の検討は、ともすれば難解ともみられる吉阪の理念と活動に一貫した描像を与え、その開かれた解釈へと通じさせるために欠くことのできない作業と思われる。

本研究は新出資料に基づいて、これまでは十分に検討されていなかった1938年の大学入学から1952年の留学終了までの期間の吉阪が、何に接し、何を考え、何を構想していったかを解明し、彼の住宅・都市理念の形成過程と特質を明らかにすることを目的とする。

1.2 研究の方法

本研究で新たに検討の核に据えるのは、現在、吉阪家に保管されている吉阪隆正旧蔵資料（以下「吉阪家資料」）である。1981-86年の『吉阪隆正集』編集の際に移管されたもので、一部に内訳記入などがあるものの、ほぼ未整理の状態にある。今回、データベース化を行ない、時系列的に情報を整理して、ノート類・手帳・日記・書簡・生原稿を中心に内容を分析した。これに公刊文献の精読と、収集した関連資料を併せ、考察を行なう。

*¹ 東京理科大学・明星大学 非常勤講師

*² 東京理科大学 准教授

2 終戦前

2.1 大学入学以前 (1917-38)

大学以前の吉阪の経歴を初めに見ていきたい。吉阪隆正は1917年2月13日に東京の小石川区竹早町に吉阪俊蔵・花子の長男として生まれ、母方の祖父である動物学者・箕作佳吉の過ごした邸宅で育った。父は東京帝国大学法科大学独法科を卒業し、農商務省などを経て、1919年にパリ講和会議全権随員となった国際派の官僚であり、1920年に内務省社会局書記官として国際労働機関に駐在することになったために、吉阪も1923年までスイス・ジュネーヴで暮らした。2度目の訪欧は小学校卒業後の1929年から1933年にかけてで、ジュネーヴの郊外に建つ洋館を住まいとし、国際連盟の関係者のために1924年に開校したl'Ecole Internationale de Genèveに通学した。授業のうち最も印象的だったのは、歴史・地理学教授 Paul-Marie Dupuyの気候風土や文化歴史の講義で、さまざまな地域の考え方や生活の違いを知って影響を受けたと後に回想している^{x5)}。父の手引きで登山を始めたのもこの渡欧中である。イギリス・エディンバラへの留学を経て帰国し、フランス語と英語の能力を身につけた。建築への関心は、ものづくりへの興味や、箕作佳吉がかつて建築家を目指していたと聞いたことなどから育まれたという^{x6)}。建築を学ぶならと1935年に早稲田大学第一高等学院理科に入学。1938年に早稲田大学理工学部建築学科に進学した。

大学以前の生い立ちから吉阪の特殊性を抽出するとすれば、第一に西欧の住まいを体感していたことが挙げられよう。2度目の訪欧の際にはル・コルビュジエの設計によるクラルテ・アパート (1931年竣工) の内部を訪れてもいる^{x7)}。建築学を学ぶ以前から、生活体験や歴史・地理学を通じて、生活と人間の多様性に触れていた。このことは後の吉阪がモダニズム建築に対して同世代の建築家と異なる接し方をしたことに対して、一定の理解を与えていると思われる。

第二に重要と考えられるのは、生涯の趣味となった登山である。それは地理学的視点を後押ししただろう。事態を一步引いて観察する視野を涵養したことも想像に難くない。より注目すべきは、人間の手の延長にある技術を駆使して自然をその本性の枠内で克服していくという技術と自然の往還関係が、その後の吉阪の建築・都市構想に一貫して見られる点である。アルピニズムの本場で親しんだ登山は、吉阪の技術への関心とその性格の理解を規定したのではないか。

2.2 大学入学から終戦まで (1938-45)

続いて1938年4月の大学入学以後、1945年8月の終戦までの経歴を検討したい。まずは早稲田大学理工学部建築学科の教師陣から受けた影響である。いくつかの回

想が伝わる。伊東忠太に関しては、後年の吉阪とアジアへの視線が共通すると思われるが、その建築史講義にはむしろ西洋中心主義を無自覚に継承していることへの反省を覚えたと言っている^{x8)}。今和次郎の農村調査には学生時代から何度も同行したという^{x9)}。ただし、詳細は明らかでない。環境工学の基礎を築いた木村幸一郎からは1939年の日本雪氷協会結成に誘われ、以後も会員として活動した。3年次の1940年7月21日から9月12日にかけては、日本学術振興会第39小委員会の委託を受けた佐藤武夫・平山崇・十代田三郎の中国北部・内モンゴル行きに同行し、現地の住居調査を行なった^{x10)}。その際に新京都市計画の集団住区などを中心的にまとめていた^{x11)}同窓の先輩である秀島乾に出会い、都市計画の面白さと必要性を強く感じたという^{x12)}。

教師以外から吸収した情報については、残された筆写ノートがその一端を明らかにする^{x13)}。表2-1が内容の一覧である。書き写された文献の発表年は1930年から1940年にかけてとなっている。このうち、和辻哲郎『風土—人間学的考察』のみ後述する「北支蒙疆に於ける住居の地理学的考察」(1940.10)の参考文献と重なる。内容から筆写ノートは大学在学中の自主的な学習を示すものと推定される。学生時代の吉阪が、ル・コルビュジエ(1)、ブルーノ・タウト(21)、アントニン・レーモンド(27, 29)といったモダニズム建築家の論に触れていたこと^{註1)}、同時に幅広い人文的教養を吸収していたことが分かる。中でも芸術学(3, 5, 11等)、日本とアジアの民俗(12, 17, 23等)、技術論(4, 22)の文献が目立つことを、建築学に隣接するこれらの方向への興味の芽生えと判断して良いだろう。

1941年3月の大学卒業後、吉阪は助手として大学に残り、1941年7月末から9月にかけては千島列島に赴いた。これは今和次郎が総合北方文化研究会から受けた家屋調査の委嘱を引き受けたものである。今和次郎からは1942年に日本女子大学の住居学の講義を引き継いだ。しかし、同年8月15日の応召によって研究活動は中断される。日本各地や中国東北部などを転々とし、朝鮮半島の光州で終戦を迎えた。応召までの2年間の研究は、地域と住居の関係に関するものが中心である。主要な論考について、節を改めて内容を分析していこう。

2.3 「北支蒙疆に於ける住居の地理学的考察」(1940)

前述した1940年7月21日-9月12日の中国北部・内モンゴル調査に基づいて同年10月31日に書き上げられ、大学卒業論文として提出された^{x14) 註2)}。図版と共に現地住居の形式・材料と気候風土との対応を論じ、穴居や泥を固めたできた住まいを中心に素材の用法を観察し、併せて漢民族・欧米人・日本人の住宅の形式を報告している。本論の内容は佐藤武夫や十代田三郎らが当時行なってい

表2-1 筆写ノートの内容一覧

No.	表題	著者名	誌名	発行所名	発行年月	状態
1	ル・コルビュジェ検討	谷口吉郎	「思想」	岩波書店	1930.12	筆写
2	建築論	山際靖	『芸術通論』	第一書房	1940	筆写
3	芸術社会学	甘粕石介	『芸術論』	三笠書房	1935	筆写
4	-	榎本セツ	『技術史』	三笠書房	1938	筆写
5	時代としての美術	ウイルフヘルム・ビンダー著、神保光太郎訳	『ヨーロッパ美術史に於ける時代の問題』(美術叢書第3巻)	第三書院	1932	筆写
6	第六章 建築	ヘルマン・コーヘン著、村上寛逸訳	『純粋感情の美学』	第一書房	1939	筆写
7	-	岸田日出刀	『オットー・ワグナー』	岩波書店	1928	筆写
8	ナチスの文化政策	内田繁隆	「理想」	理想社	1936.3	筆写
9	-	大西昇	『美学及芸術学史』	理想社	1935	筆写
10	-	エルナ・マイセア女史	『新世界美学』			筆写
11	-	ヴェルフリン著、守屋謙二訳	『美術史の基礎概念-近世美術に於ける様式発展の問題』	岩波書店	1936	筆写
12	支那藝術の精神主義	林語堂著、吉村正一郎訳	『支那のユーモア』	岩波書店	1940	筆写
13	支那建築の原理に関する覚書					筆写
14	諸藝術の分類と世代	山際靖	『芸術通論』	第一書房	1940	筆写
15	ルネサンス藝術の精神	中村恒夫	「思想」	岩波書店	1937.7	筆写
16	-	柳田国男	『木綿以前の事』	創元社	1939	筆写
17	民族と伝統との問題	谷川徹三	「思想」	岩波書店	1937.4	筆写
18	アラビヤ断片	矢崎美盛				筆写
19	人格様式と事象様式	ローゼンバルク著、丸川仁夫訳	『二十世紀の神話』	三笠書房	1938	筆写
20	-	瀧口修造	『近代藝術』	三笠書房	1938	筆写
21	日本建築の基礎	ブルーノ・タウト講演、玉田富雄訳	『建築知識』	建築知識社	1938.2	筆写
22	技術の世界像	P.P.エヴァルト編、永野皓二・石黒森太郎・勝谷在登共訳	『技術と自然科学的世界像』	白揚社	1940	筆写
23	-	和辻哲郎	『風土-人間学的考察』	岩波書店	1935	筆写
24	-	セシル・グレイ著、大田黒元雄訳	『音楽芸術史』	第一書房	1930	筆写
25	建築汎論	佐藤功一	『早稲田大学建築講義』	早稲田大学出版部	1941	抜刷
26	構成美論	今和次郎				抜刷
27	日本建築に就いて	アントニン・レーモンド	『アントニン・レイモンド作品集1920-1935』	城南書院	1935	切抜
28	日本の家の印象	ミルコ・アルデマキ	「朗」	日本電話建物出版部	1939.4	切抜
29	日本建築の傳統に學ぶ	アントニン・レーモンド				切抜

た日本列島以外での居住形式を探る研究の一環に位置づけられ¹³⁾、ほぼ実地報告に留まっているが、序論に吉阪の建築思想の原型を見ることができる。

序論ではまず「諸般の科学の発展に伴い、建築学は今日益々分析的に各方面に拡がりつつあり、ややもすれば建築を離れんとする傾向にある。之を思い之を憂いて、近頃建築に再び総合の必要を説く者が多い。私はこの声に大いに刺戟され、考えさせられた」と述べ、「人間も結局は自然の一生物であり、地上に建てられる建築も自然の影響なしにはすまないものであるから、ここまで遡ってこれをもととして建築を見なおそう」として、地理学的立場からの新たな建築の総合を目標に掲げている。

そこにおいてはPaul Vidal de la Blacheの『Principes de la géographie humaine』(人文地理学原理、1922)や今和次郎の『日本の民家』(1922)などが参考になるが、それらの大部分は「具体的な諸々の関係から総合統一した法則を見出し体系づける事を目的」とする「地理学者」の研究である。これに対し、自らの狙いは「その法則を把握する事によって新たな建設へ運用しよう」とする「建築の地理学的考察」だと、師の今和次郎とも区別しながら、自らの「建築家の立場」を強調している。

では「建築家」とは何か。「人間は世界から作られ、作られたものであり乍ら独立なものとして逆に世界を作つてゆく」という三木清の『哲学入門』(1940)の言葉を引用して、「更に自分の作った世界に再び作られてゆくという事もいわれるのではあるまいか」と続け、「建築家の仕事といえ、その諸法則を求め、知って、それによって建築を計画し、建設して行くにある」と謳う。

最後に「今日は交通が頻繁になって、文化の交流が盛んに行われ(中略)国際建築すら唱えられるに至ったのであって、地理学の唱えるが如き地域性を主張するのは愚の如く見られるかも知れぬ」という予想される疑問に対して、今日ではそのように建築が都市、地方、国土全体、隣国と密接な関係にあるのだから、逆に「一つの建築物と雖も大きな立場から之を計画せねばならぬ。ここで地理学的という事が問題となる」と反駁し、交通が盛んになった現代において地理学的研究に立脚した都市計画・国土計画の重要性は一層増大したという立場をとる。すなわち、「各地域の個性的特質たる精神的並に物質的発達を完全に発達せしめ、それらの自由さを失はずに全国家の経済、社会、並に文化の統一と進展に寄与させる為に(中略)地域の問題は益々重要になるのである」。後

代状況の中から、異なる風土や文化と直面せざるをえないという要素を採り上げ、ヨーロッパで体験した大戦初期の異文化理解の気風と結びつけようとしたのである。

影響元である多くの分野と吉阪自身が異なるのは、事態をただ解釈するのでも、指針を立てるのでも無く、実際に物を生み出す「建築家の立場」に自らがいるという自覚である。しかし、時代は実践を可能にする状況ではなかった。論考や資料からも具体的な建築創造の形に対する確信を見出すことはできない。吉阪の建築思想の原型は終戦以前に確立している。だが、それが戦後の設計に直接つながるわけではない。建築設計を可能にする状況を待たねばならなかった。しかし、それは建築をとりまく思想的・社会的環境の大変化も意味していた。

3 戦後

3.1 活動の全般

1945年に帰京した吉阪は早稲田大学の助手と日本女子大学の講師に復帰し、1946年には東京農業大学と早稲田大学の講師となる。1947年には早稲田大学助教授に就任。1950年8月にフランス政府給費留学生として離日するまでに『住居学概論』（1949）、『住居学汎論』（1950）を執筆するなど、教職や研究に勤しんだ。次節から、この間に参加した研究会等、建築構想、主要な論考の分析を順に行ない、最後に総合的な考察を加えたい。

3.2 参加した研究会等

1945年から50年にかけて吉阪は、住宅・都市関係を中心に、多数の研究会等に参加している。吉阪家資料から見出された1945年12月-1950年1月の日記²⁴⁾、関連する20数冊のノート類は、戦後建築界の動きを明らかにする。詳細が判明したものを軸に、時代を追って見ていく。

1) 国土会、日本建築文化聯盟

高山英華を代表に、戦前の「日本工作文化聯盟」のメンバーや都市計画関係者が中心となって結成された。1946年6月8日に結成大会を開き、1947年6月の「新日本建築家集団（NAU）」結成に合流する形で解消した。

吉阪家資料の関連記述で最も早いものは1946年3月20日の日記である。「乾元社にて国土会。四畳半に二十名近く押込みて」、浜口隆一の北海道集団帰農と星野昌一の帝都復興計画図案懸賞設計の話がなされ、「東京都計画展示計画」を国土会として行なおうという話も出たという。会の前身に1945年9月から会合を行っていた「国土会」や、内田祥文らの「乾元社」があったという指摘を裏付ける²⁷⁾。5月20日の記述は「日本建築文化連盟（乾元社にて）—他の文化団体との協同のため民主建築文化や自由文化、住文化（何といふ「文化」ばやりのことよ）との懇談」というもので、「日本建築文化連盟」の名称が現れている。同年9月の「全日本建築民主

協議会」設立につながる動きも始まっているのも分かる。5月27日には京都から西山卯三が出席して「関西建築文化連盟」の動きを話し、また「雑誌『計画』刊行に関し、各自の夫々の論文集とするか、住宅問題特輯とするか、都市計画懸賞図と共に懸賞の批判を載すべきかなど論ぜられ」た。6月3日の岸体育館での結成大会は「要するに政治力なしと見たか新聞社の出席早大新聞のみ」。発会後第1回である6月10日には、小泉嘉四郎・本城和彦・高山英華・丹下健三・浅田孝らと文化会館計画の検討を行ない、以後、14日・18日・21日・24日の議事メモが残る。7月初め、あてにしていた7億5000万円の献金が社会事業費に繰り入れられることになって計画は潰えたというのが、吉阪家資料からの最後の情報である。結局、機関誌『計画』の発行は1号のみで、翌1947年11月に持ち越された。これに吉阪も寄稿している²⁸⁾。少なくとも記録が残るこの時期、吉阪は日本建築文化聯盟の会合に頻繁に出席し、都市的な施設を検討することに対する興味も抱いていた（6月10日）。一方で、5月20日の記述や「カメレオンの会」（5月27日、6月14日）という表現は、新京の都市計画を率いた高山英華らの変わり身への疑義の現れといえる。都市計画の必要性を強く感じながら、上を向いて政治の後を追いかける以外の方向性が無いかと模索する心理は、当時の日記からも見てとれる（2月10日、3月26日）。

2) 都市計画懇話会

日記によれば1946年4月20日に「住宅営団にて都市計画に関する自由懇談会」が開かれた。5月4日にも開催され、都市計画の理論と現実の食い違いを階級闘争に結びつける議論がなされた。日記における「結局は時間を考へに入れて歴史的地理的必然性をどこまで洞察して、即ちどれだけの条件を許容して先行した計画を建てるか」との言葉には、計画の片面的な明快さではなく、その許容度を問う吉阪の思想が読みとれる。

3) 多雪都市復興計画研究委員会

当初、戦災復興院総裁官房技術研究所内に作られた委員会で、1948年5月に「多雪地方建設計画委員会」と改名した。吉阪は1946年5月18日以降、幹事として出席している。これと直接の関係は無いが、同系統の要務として日本雪氷協会への関与がある。戦前戦後を通じて機関誌『雪氷』に多くの記事を寄稿しており、関連の出張や理事会理事会・編集委員会・展覧会準備などへの活発な参加が日記や議事ノートから読みとれる。多雪都市建築の研究者としての顔も留学前の吉阪の側面であり、留学後の山荘建築の設計などに接続する。

4) 住宅改善会

小林政一の肝煎で作られ、研究費が支給された。1947年2月12日のメモによれば、吉阪の申請題目は「民衆の要求する住宅水準の調査」で、これは「武蔵野町住宅調

査に基く家族構成と住居の型について」として学会報告された^{x19)}。資料によれば、同年6-8月に江戸川アパートの家具調査も行っている^{x20)}。吉阪も戦後の研究潮流に乗って、住宅の統計的調査の一翼を担っていたのである。

5) 都市地理ゼミナール

吉阪家資料内のノートに、菊竹清訓・椎名政夫ら学生19名の住所録が挟み込まれている。それによれば経緯は次の通りである。1947年6月23日に「学生に与える研究題目選定のため、都市の分類について討論」し、25日に学生への要項説明と希望聴取、27日には学生を「基礎数値の整理（大林）／気象資料の整理（篠原）／建築物、特に文教（吉阪）」の3グループに分けて研究を開始した。ここから、住宅改善会のような個別研究と並行して、学生と共に都市の基礎的考察を進めていたことが分かる。

6) 新日本建築家集団 (NAU)

1947年6月28日に第1回総会を開催し、戦後の建築諸団体を統合する形で結成された。吉阪は常任委員26名中の一人であり、会の最盛期である1949年に「NAU NEWS」編集責任者を務めた。渡仏のため、1950年に活動を退いた。会自体も1951年末頃に活動を停止した。

断片的な記入ではあるが、関連する手帳が残されている。1947年7月19日の常任委員会の議事メモと日記が、確認できる最も早い記載となる。その後、綱領の素案や1949年2月5日のNAU研究会の記録なども見られる。NAU研究会では1949年3月5日に「設計を決定する条件の研究」の発表を行い、ル・コルビュジエの『La Ville Radieuse』の抄訳を1949年11月発行の『NAUM』第2号に掲載した。戦後の建築運動を代表するこの会に、吉阪も参画していた。研究会の記録からは議論の潮流を受け止め、思考していた様子が伺える。

7) 都市計画研究連絡会

戦災復興院総裁官房技術研究所内の委員会で、1947年8月1日の参加の記述と、同年12月12日の第6回議事録（第22報）が残る。1948年1月に建設院に改組されてからも委員会は継続し、都市計画上の建物分類などを討議した（4月13日）。会議には秀島乾や高山英華も出席しており、秀島が分類の後の総合の必要性和、消費中心から生産中心への重点の移動を主張し、高山が都市計画家が計画以前の問題の解決にまで手を出さねばならない「悲劇」を難じたことが日記に記されている（1947年8月1日）。こうした会議を通じて、吉阪は都市計画の先導者たちの生の声に触れていたのである。

8) 都市計画技術研究所

1947年6月17日の日記に「丹下邸にて、都市計画技術研究所設定の準備委員会」と記され、「『計画士』の集まりは計画ばかり樹て、中々実行し切れない。こゝに今夜又一つ皆は新しい計画をたてた。金がない人々が虎の皮ばかり数える姿!/?／やらうとゆう気はけなげ、だ

が。」という感想が加えられている。その他、8月1日に「東大にて都市計画技研の寄付金のことについて打合せ」という記述があるのみで、活動の実際は不明である。一つの可能性として、丹下健三と武基雄が中心となって1947年5月12-17日に三越本店で開催した「都市復興展覧会」とのつながりが推測できる。日記によれば、2月9日に阿佐ヶ谷の丹下宅で市川清志・石川充・丹下健三・浅田孝・大谷幸夫・大林新と打ち合わせた。それ以降、徹夜交じりで準備を進めており、この余勢を駆ったのではないかと。戦後の吉阪は丹下をはじめ、新たな都市計画を試みようとする同世代の研究者と横断的な交流を行っていた。これもその一つの証左である。

9) 日本建築学会住宅対策委員会

1949年3月4日と14日の議事メモが残る。委員は他に高山英華・秀島乾・篠原隆政・早川文男ら。国会からの研究費獲得、「住宅問題を政治的にとり上げさせる」ための活動分担など、国会や建設省、メディアといったさまざまな方面に都市・住宅計画の必要性を働きかけようとしている。3月19日に「戸山住宅を住宅対策委員はどうみるか?」という座談会を行い、「新建築」に速記録が掲載された^{x21)}。同誌の関連で吉阪は1947-49年に5回の「新建築」住宅コンペ審査員を池辺陽・清家清らと務めている。これも戦後住宅の識者の一人という吉阪の建築界における位置づけを反映したものといえよう。

10) 日本建築学会建築設計資料集成続刊委員会

1949年2月に設置されたこの委員会に関しては、7月15日の第2回議事録と、9月26日・10月10日・10月17日の議事メモが残る。高山英華が世話人で、委員に下河辺淳・吉武泰水らがいた。「都市計画原論というべき問題を整理できれば、これに越したことはない（武君、丹下君などに依頼する予定）」、「完成は本年一杯を目標とする。なお建設省関係で住宅地計画はかなり急いでいると思はれるのでそのつもりで努力すること」といった議事録に、戦後の都市計画学の基礎固めへの意志が読みとれる。吉阪は「多雪都市」の主査を任された。吉阪が戦後の都市計画・建築計画のスタンダードを確立しようという議論に渦中で触れていた事実は、その後の彼の都市・建築思想を考える上でも重要と思われる。

3.3 建築構想

研究会等での作業と平行して、吉阪はコンペ、住宅構想、住宅試作に携わった。留学前の本格的な実作の無い時期において、いかなる建築創造の形を構想していたかを示す資料である。新たに判明した事実を中心に述べる。

1) 泥の家

佐藤武夫と共に終戦直後に取り組んでいたもので、既往の報告が無いため詳細は不明だが、1946年1月から材木を用いて壁を立ち上げ（1月22日等）、窓を設け（1

月24日)、屋根を葺こうとしたところで(1月31日)、凍害で一部が崩壊した(2月4日)。「柳町にて泥の家二軒を発見す」(3月25日)との記入も見られ、土を主材料とした代用家屋の実験と判断できる。吉阪の思いは「泥の家」と題された1945年12月20日付の原稿に示されている²²⁾。「現代の住宅難も正にこの辺に主原因がありそうだ。廻れ右をして今一度出発点より問題を検討する時期ではあるまいか。原始人達が家を建てるに当つて行った努力、その努力を現在の立場に於てもう一度考へなほして見てはどうであらうか」。ここから分かるように、「泥の家」は終戦直後の状況を反映しながら、原始住居に着目し、それを創造の根にするという卒業論文以来の思考が重ね合わされている。

2) 銀座消費観興地区計画

東京都商工経済会主催による「帝都計画復興図案懸賞」は、東京都都市計画局長・石川栄耀の後押しによって1946年に実施された。銀座・新宿・浅草の消費観興地区、本所深川の中小工業地区、月島芝浦の運輸地区が対象地区とされ、吉阪が中心となってまとめた銀座消費観興地区計画は1等を獲得した。石川栄耀の後押しで在京の大学が行なった文教地区計画もこれと同時期で、2月から5月にかけて秀島乾・武基雄らと早稲田地区計画を策定している。両計画とも実現されることは無かったが、吉阪が接した石川の意気込みは次の文章に明快だ。「都計 石川氏に会い文教地区等の方針を聞き資料ももらふ。『早稲田はのろいぞ。』とアジられる。『大きな夢を描け、断行するから』と」(2月13日)²³⁾。

銀座消費観興地区計画の骨子は次のようなものだ。「盛り場の楽しみはやはり雑間にあり、封鎖的な世界に入った感じを必要とする」という判断から、商店街は「迷宮的な平面配置」として路地の気分を出す。「一方露店については、闇市の延長なりとして一概にこれを追い払わず、逆にその雰囲気を残して内容の健全なものとする。街が分断されるとして、昭和通りの100m道路化に異を唱え、主要道路を高架として、地上を歩行者専用にする。今ある道路は大部分を帯状の公園に変えて「銀座は緑の中の商店街、飲食街としてしまう」。

これは吉阪の初めての都市デザインである。その内容には路地性や人工と自然の混在、用途の混成といった特徴が見られ、吉阪が1946年の時点で後の大島計画(1965-69)、仙台計画(1973)などと共通の指向性に達していたことを明らかにする。

3) ヴォールト型住居

構想段階に留まったが、ヴォールト型住居への関心は終戦直後の住居に対する考え方を示す。1946年6月の「建築文化」に千代田区隼町のパレス・ハイツに建った「かまぼこ兵舎」(Quonset Hut)の紹介記事が載った²³⁾。吉阪が「新構想の住居」というタイトルを冠した意図は、

日記のほうに明快だ。「ヴォールト型住居の造型的検討は面白い課題ではあるまいか」と記し、「天壇ですら農村の省蒙の墓場を拡大しただけに過ぎない」として、これを新たな造型の糸口になるとみている(6月16日)。実際、「アーチ型原始人の住居の資料あつめ」も行なった(6月19日)。この頃、吉阪は同年1月に開館した日比谷のCIEライブラリー²⁴⁾に足繁く通った。6月5日には「Architectural Forum」からテネシー川流域開発公社の記事をノートを抜き書きして「そこに新しい世代の生活の基がある」と記している。以上から伺えるのはアメリカの近代技術に対する旺盛な関心であり、それがアジアの民家建築という戦時下の状況で接したものと重ね合わされているところに彼の思考の特徴が読み取れる²⁶⁾。3月27日には「バラックでも銀座には案外スケッチに値するものがあるのは嬉しい」と日記に記し、「詩的情緒や耽美的なものに満足して以て名建築なりとする」日本の建築界の傾向を批判している。焼け跡を原始とみなし、生活と密接した技術から新たに造形される住居像が、彼の心中にあったのではないだろうか。

4) 自邸

東京大空襲で焼け跡となった大久保の自宅跡は、上記のような新たな住宅・都市の構想を実現すべき場所として考えられていた。1946年5月26日の日記を引用しよう。「コルビュジエ翻訳。ひる雨も上がったので計画通り焼跡に行く。(中略)家を建つべき所を頭に描きながら土台を眺めて弁当を食ふ。その家の構想。それを単なる一戸建てにしたくない。何か生活に対する一つの試を打ち建てたい。成長する家とか隣組と一つになった集団化生活を可能ならしめるものに。この隣組を如何に啓蒙するかの問題。インテリ内だけで自己満足しているべきではない、今は」。1947年3月15日には「住宅スケッチを試みる。将来の高層住宅の原型としての構想。Utility中心といったプラン」と書いている。しかし、新築は金銭的な都合で実現せず、旧家の移築・改造と小さな書斎の建設で終わった。「人工土地」のプロトタイプである吉阪自邸(1955)の設計が実際にスタートしたのは留学後である。だが、都市的住宅としての提案性を備えるという方向性は、留学以前に抱かれていたのだ。

5) 広島平和記念カトリック聖堂コンペ

これまで明らかでなかったが、吉阪は1948年6月10日締め切りの広島平和記念カトリック聖堂コンペに応募している。4月15日には応募規定をまとめた今井兼次と、その中の「『日本的性格』について論じ」、「兜をかむった満州式の不可はよいが、コンクリートの機能(狭くは構造的表現)から一步何かをというのがあるかないか」と書いている。武基雄と菊竹清訓と各々の案を持ち寄り議論したこともある(5月15日)。結局、吉阪の案は選外に終わる。住居・都市を中心とした留学以前の作

業とは直接の関係は無いが、単体の建築を設計することへの意欲と模索が留学以前にあったことが分かる。

3.4 主要な論考

留学以前にまとまった著作に『住居学概論』（1949）と『住居学汎論』（1950）がある。1945-50年の間の研究を概観した後に、内容の考察に移りたい。

1) 戦後の研究構想

終戦以前の自らの研究を吉阪はどのように位置づけたのだろうか。大晦日に1945年を振り返り、「行はんとせし共栄圏の研究は今や一場の夢と消え去りぬ。残るはただ平和建設のための意欲のみ」と記している。一方で「地理建築学の構想」を練っている（12月25日）。地理的な建築学への関心を失ったわけではなさそうだ。それを戦後に具体的に展開できる場所は日本雪氷協会の「積雪学」だった。1946年7月の「積雪学への提案」で「自然的環境のみならず、また文化的環境」に配慮し、「科学的な分析とともに芸術的な創造」によって、地域性を生かす提案を行なっている^{x29)}。戦後復興計画に取り組んでいたこの時期、大林新と「帝大の都計は分析的なれば早大は総合的研究に進むべきなりなど論」じ（1946年3月26日）、「都市美の造型的研究法について」今井兼次に相談して（6月6日）、本を書くとする「積雪学か、都市造型かと考へて」いる（6月22日）。「材料学」の研究も戦前からの連続点で、それは都市計画への関心に地域性とボトムアップの意識を一層追加しただろう。こうして見ると、1945-47年の吉阪は戦後の「都市計画」の流行に飛び込みながら、戦中からの「地理建築学」との融合を模索していたと考えられる。分析的な都市計画に、地域性を生かし、生活に密着した総合的な美を導入しようという目論みである。もちろん、その困難と戦中・戦後の連続性は以下のように自覚している。「『研究にも流行がある。誰も彼もが今は都市計画に走っている。丁度震災のあとで誰も彼もが耐震耐火をねらった様に』と佐野先生はいわれる。果してそんなことで自分はこの方面につっこんで来たのであろうか。比較建築学や地理建築学を唱えたのは大東亜共栄圏の地政治学的流行のためであつたらうか」（1947年7月1日）。

「住宅」も戦後の建築界の議論の中心だった。これも戦前から吉阪が受け持っていた分野だった。復職した日本女子大学の「住居学」の授業で戦前の教科書がそのまま使えない事実と直面し、今和次郎の「『住生活』はその点に示唆するものが多い」と書いている（1946年1月22日）。また、「生活の概念をつかまへずに分析するのは役に立たぬ」という今和次郎の西山卯三評（6月15日）に同意するかのようになり、女子学生の住居観の調査を行なっている（6月1日）。

理論と実践をどう架橋するかという卒業論文以来の問

題は、1947年以降に強く意識されたようだ。初期の戦後復興計画が実効性を失った時期に、吉阪の関心は社会経済学や社会生物学（Social Ecology）に向かう^{注7)}。それは人間を中心に住居と都市をつなぐものとしても認識されており、吉阪の「住居学」に独自の性格を与えた。

2) 『住居学概論』（1949）

日本女子大学家政学部通信講座の教科書としてまとめられた^{x26)}。内容は、住居の定義と分類（第1章）、歴史（第2章）、材料・設備（第3章）、設計から施工のプロセス（第4章）、庭の歴史（第5章）、住宅問題の現状（第6章）といった順序で進み、「自然環境と住居の形態」（1942）や住宅改善会に関連すると思われる生原稿「住宅の分類」（1947）と同じ記述も見られる。教科書の形を取りながら、終戦前からの住居への取り組みを総合したものといえる。

本書の全体から、吉阪の建築観に関わる2つの特徴を見出すことができる。一つは住居と都市を一体で考察しなければならないという意識である。冒頭では、人間の生活時間を第1生活（生理的な休養・食事等）、第2生活（第1生活を支える家事・労働等）、第3生活（精神的な創造・遊戯等）に分け、これらが時代と共に住居から分離していく傾向にあるため、現在では「完全な住居」であるためには「完全な都市」でなければならないとする。第6章で提示される住宅問題解決の4つの方面は、みな公的・社会的な性格を帯びている。やや唐突にも思える庭の歴史（第5章）も、私的空間と公的空間の接点として外部空間を重視していることの現れである。こうした「住居-都市」の思想は戦後の建築界の思潮に沿ったものといえよう。ただし、吉阪の場合、都市から住居を捉えるのではなく、住居を考察することが必然的に都市を要求するとして、住居から都市を捉える。研究の出発点に「住居学」があるがゆえのこうした特質は、本書によって整理され、以後の活動の揺るぎない軸となる。

二つ目の特徴は住居の本質が空間であるとし、空間を認識するのに感覚的・知性的・観念的の3種の方法があるという認識である（第3章）。3種はそれぞれ、手に触れたり目で見たりといった五感によって知ること、意識の中で計量化して知ること、「同じ室でも唯独りで坐っている時と、多数の人々と談笑しながら居る時とでは、その室の中に居て違った広さを感じる」ようなこととして説明されている。このうち最後のものは心理的で可変的なものである。「空間」を建築の根幹とみなす考え方もまた戦後建築界の思潮だが、こうした不均質な性格までも「空間」に含意させるのは特殊である。これに一つ目の特徴を併せると、以上のような住居の空間性は、「生活圏」の概念を通じて、都市にまで延長することになる。こうして建築は「住居-都市」として捉えられ、その本質である「空間」は均質性だけでなく、個別的な不

均質な性格を与えられるのである。

3) 『住居学汎論』 (1950)

1950年5-8月に急いでまとめられたものだが²⁸⁾、教科書としての要請が薄らいだこともあって、留学以前の吉阪の建築観が、より能動的な形で浮かび上がる²⁷⁾。全4章のうち、第1章の大半と2・3章は『住居学概論』の第1・2・6章が下敷きである。「反人工的な自然」が人間生活の場であって、その「中心に住宅が核の如く存在している」という記述が加わるなど、前節で抽出した『住居学概論』の主張は、より明確になっている。

新たな主張は、前後に付加された「はじめに」(第1章第1節)と「将来への課題」(第4章)に現れている。前者では「生命なき物品も亦自分自身と見られる」とし、「私達の生活はこうして、大量の品々と結びついて、はじめて個人としての生活も保たれている」のであって、「物を代表するのが住宅」だと記して、精神面も含んだ人間存在の延長として物を捉えるという視点が明示されている。このような考え方に立てば、住居は生活を容れる「容器」であるだけでなく、自己の延長である「物」としても配慮されなくてはならないことになる。

後者では建築家の立場が強調されている。「人間の描いた理念が実現される所に技術がある」とし、その本質である「自然に対する人間の能動的な関係」=「発明」に重きを置く。これを新たな「物」の発明が新たな人間生活の形成にフィードバックすることの意義を強調する姿勢とみなして良からう。このように本書は、「人が世界を作り、自分の作った世界に再び作られてゆく過程」の法則を把握し、それを適用する「建築家の立場」に立脚した卒業論文の10年後の帰結として読み取れる。

3.5 内省

留学以前の研究会等、建築構想、主要な論考の内容を詳らかにした。総合的な考察を行なう前に、この3つにまたがる事柄を本節で扱いたい。一つは多方面に及ぶ活動に本人が必ずしも満足していなかった事実である。「成果をあせらず、もっと根本の、国際的価値あるものを追求せよ」(1947年7月6日)、「戦線整理の必要」(1949年2月1日)といった類の記述が日記に散見される。もう一つは、自らの相対的な物の見方が、一つに決定できない弱さを含んでいるという自覚である。それは「俺には〈中略〉一つだけの見方で進むといふことが出来ない」(1946年4月2日)、「信じるとは賭けることだとか〈中略〉賭のきらいな人間はどうしたらよいのだ」(1948年3月31日)といった言葉に端的に示されている。1949年のMITサマーセミナーに自主的に応募した書類が残されている。これも状態の打開策として考えられたようだが、選には漏れた。

3.6 小結

以上をまとめると、終戦から留学までの5年間に吉阪は戦後の建築界の思潮に影響されながら、住居と都市を一体で考察しなければならないという考えを強め、「住居-都市」の思想を独自に深化させたとみられる。これまで考えられていた以上に、この時期に住宅・都市に関係した多数の研究会等に参加し、東京大学を中心とした研究者と緊密な交流を持ち、戦後復興都市計画に関わり、統計的調査を行っていたことが資料から明らかになった。これら戦後の都市計画学・建築計画学への接近は、終戦前からの住居と都市への関心に、より具体的な視点を付け加えた。一方で一律的で政策追従型の、いわば「上からの」計画への懐疑を育成した。背景には、建築をとりまく思想的・社会的環境の大変化にも関わらず、吉阪が「地理建築学」の方向性を手放さなかったことがある。その立場から見れば、都市計画の議論は一律的であり、同時に戦前の方向性を一夜にして捨て去るほどに、戦中と同様の政策追従型に感じられたことが資料から分かる。

『住居学汎論』(1950)の内容は、焼け跡を原始とみなす終戦後の住居と都市の構想や、今和次郎らからの影響、社会生態学など広範な文献読解を経て、練り上げられた。それは「住居から都市へ」拡大する形で「住居-都市」を一体に捉える思想である。そこで構成される「空間」は心理的で可変的な性格も含み、それを構成する物は人間存在の延長ともみなされる。「建築家」はこうした「人が世界を作り、自分の作った世界に再び作られてゆく過程」を理解した上で、「発明」としての創造行為を行う存在である。それによって人々が個々の欲望を満足させながら、混乱に陥らないことができる。

留学以前の吉阪は、以上のような「住居-都市」思想を、卒業論文(1940)の具体化として獲得していた。それは同時代の俯瞰的で教義的な思潮と一線を画するものだった。1950年代後半以降の吉阪が「不連続統一」や「有形学」といった言葉で表現する概念は、基本的に留学前に出尽くしていた。だが、吉阪が自らの定義した「建築家」を目指すことが、留学以前に可能だったとは考えづらい。内的には、設計に必要な「決定」を可能にする方法論が欠けており、外的には、広範囲に広がった専門と関心が足を引っ張っていた。吉阪自身、そうした状況を内省し、海外渡航に希望を託していた。

4 留学中

4.1 留学の全般

1950年8月23日に吉阪は戦後第1回のフランス政府給費留学生として離日し、9月23日にマルセイユ港に到着、25日にパリに入る。10月23日にル・コルビュジエと初めて会い、アトリエで働くことになった。当初1年間の留学を2年間に延長し、ロク計画・ロブ計画やジャウル邸の設計に携わり、マルセイユのユニテでは現場監督に派遣

され、ナント・ルゼのユニテの実施設計をまとめるなどして、1952年11月11日に帰国した。出発時に提出した研究計画書には、建築都市計画理論、住居と生活の関係、建築・都市教育の3つの研究目的が記されていた²⁹⁾。滯仏の間には図書館や博物館に通い、講演を聞いたり²⁸⁾、パリ以外のさまざまな場所に出かけたりして見聞を広めた。しかし、その中でも最も大きな影響は、やはりル・コルビュジエからのものだった。これは資料から明らかである。留学以前の「住居-都市」思想との関わりに焦点を当てて、思想の変遷を見ていく。

4.2 ル・コルビュジエとの出会い

吉阪は初対面で、ル・コルビュジエのもとに「何か私を刺激してマンネリズムに陥った私を救ってくれるものがある」と直観した。だが、フランス上陸の翌日に訪れたマルセイユのユニテは造形性が目立ち、人間の生活に対する配慮に欠けたものに思えた²⁹⁾。1950年12月には「今は専ら彼の都市計画の方法を研究中です。彼のcartésienな明晰さは割すぎではないか」³⁰⁾と疑いを抱き(写真4-1)、ロク計画・ロブ計画に携わっていた翌年1月には「彼の欠点なども同時に感じて来られて面白い勉強です」³¹⁾と綴っている。出会って2、3か月の時点では、ル・コルビュジエに日本で体験しなかった異質な魅力を感じながらも、住宅と都市に対する態度を人間を理性で割り切った俯瞰的なものとみて、「住居学」の視点から反発していたことが分かる。

1951年3月の書簡ではル・コルビュジエの魅力は自ら物事を決定する「勇氣」だと述べて、彼「一本で進みたい」と宣言している³²⁾。これが留学以前の弱みだった設計に必要な決定の問題と関わっているのは明らかだ。その一週間後には、自分の求めているような「現実の生活の実例の上に立った〈中略〉社会学者、経済学者、地理学者、都市計画者が主体となった〈中略〉生活学」は「Corbuのなえがしろにしている所」だとしている³³⁾この時点では、ル・コルビュジエに学ぶことと「住居学」の深化を別個のものと考えていたようだ。

4.3 ル・コルビュジエの読み替え

しかし、留学の期間を通じて、ル・コルビュジエは「住居学」的に読み替えられていく。1951年9月に再び目にしたユニテを伝統や生活に根ざして説明し、「手工業と機械工業との結合」と記した(写真4-2)³⁴⁾注10)。1952年4月に三たび訪れた際には色彩を「住居学」に引き付けて捉えている³⁵⁾。ユニテは技術による自然の克服という戦前以来の主題に適合したものとみなされた。もう一つ、具体的な事物で吉阪に大きな影響を与えたのが『モデュロール』である。1950年9月に本屋で見つけて貪り読み、「しかし、何か人間の生理とか心理とかにか

かわる問題が残されている様な気がする」と記した³⁶⁾。8章のうちの2章を訳し終えた時点で「空間構成のための公分母的存在」と解釈し、「利用法の研究、即ち音楽なら作曲法こそ、今後の研究課題となる」と評した³⁷⁾。

4.4 住居学の変容

「住居学」も現代建築に対する批判として意識され、変容していく。1951年5月には「襖紙を貼りかえて気分を転換させようというのはよい思いつきです〈中略〉そういう行為こそ私が考えている住居学のよい見本です」と説明し、それに比べて「建築学は大きな枠に留っています。人間の集団(大小の)位までが相手です。個人々人はどこかへ平均人として葬り去られています。建築家個人の表現欲は別として」と指摘している³⁸⁾。こうして一律的、俯瞰的な計画へのアンチテーゼという留学前からの「住居学」の性格はいつそう意識される。他方で、「思い出は動機に過ぎない」、「それを掴まえる力、それを発展させる努力」が重要と記すように³⁹⁾、自己と物品との関係を解釈するだけでなく、そこに働きかけ、発展させていく形の提案に積極的な価値を認めていった。

4.5 アジアへの視線

留学中には世界観も変化していった。留学当初の吉阪にあった西欧文明礼賛とも取れる発言は⁴⁰⁾、しだいに影を潜め、そこから逃れる動き、すなわちヨーロッパとりわけスイスの固定的な価値観への疑問が強まった⁴¹⁾。それがアメリカを見たいという思いにつながり⁴²⁾、やがて、インドや中近東への憧憬という形をとる⁴³⁾。並行して、日本に対しても肯定的な発言が多くなっていく⁴⁴⁾。ヨーロッパ文明の次を求めること、人間的な環境を中心に考えること、過去の日本を戦後に再発展させること。南米やインドに未来を見出すル・コルビュジエの影響と「住居学」の再考を通じて、終戦前の「地理建築学」や戦後

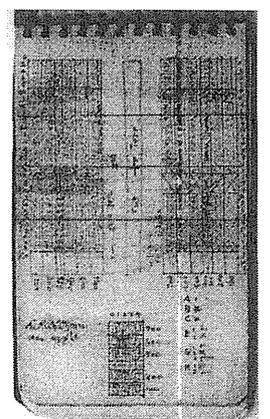


写真4-1 書簡 (1950.12.4) 写真4-2 ユニテのメモの建築・都市構想の主題がより強い言葉で表現された。

4.6 小結

ル・コルビュジエという建築家の強さは、「住居学」の意義を半ば逆説的に再認識させたといえる。その上で吉阪がとった姿勢は、ル・コルビュジエと「住居学」のどちらも捨てない、ということだった。一方で、ル・コルビュジエを「住居学」的に咀嚼し、他の多くの建築家とは異なるル・コルビュジエ認識を得る。他方で、「住居学」を現代建築と照らし合わせて、批判としての存在意義を確信し、造形による提案性を加える。西欧からアメリカ、そしてアジアへと視線の変化は、ル・コルビュジエと「住居学」の思考に深く結びつきながら、現代のヒューマニズムを求めるものとしてあった。留学の経験と、それに対する思索は、留学以前のやや相対的・観想的・西欧主義的・大正教養主義的な姿勢から、それらの価値を放棄せずに、より投企的・実践的・前進的・戦後日本的なものへと、吉阪の態度を転換させた。以上に述べたような過程を通じて、1950-52年のフランス留学は、グループ設計の方法論も含む「決定」の勇氣と、「建築家」としての社会的認知をもたらして、以後の吉阪の作品と思想の基盤を築いた。

5 おわりに

以上、吉阪隆正の住宅・都市理念の形成期である1938-1952年を3期に分け、住宅と都市に対する思想と行動を追ってきた。終戦前に吉阪は、環境に対応した多様性に建築の本質を認めてその法則性を求める「建築地理学」の方向性を獲得していた。戦後復興期（戦後・留学以前の1945-50年）にもそれを手放さず、幅広い分野の研究者との交流などで体得した当時の思潮を批判的に継承しながら、「住居学」の中に自らの建築・都市理念を結実させた。留学中にはル・コルビュジエに出会い、彼と「住居学」を独自に読み替えていった。より細かな理念の形成過程は、すでに各章の小結に記載した。最後に、明らかになった内容をテーマ別に組み替え、1952年以降の事項と併せて、理念の特質を7項目で示す。

(1) 住居と都市の一体化 人間の行動を中心に捉え、住居（住宅）と都市（環境）を一体で考察しなければならないという考え方は、卒業論文に根を持つ。戦後復興期に、現代の「建築」が備えるべき性格として確信された。全体としての「都市」から部分としての「住居」を俯瞰するのではなく、「住居」の延長として都市を捉える思想である。これは「不連続統一体」²⁴⁹⁾や「有形学」²⁴⁹⁾、建築作品、都市デザインに通底する。

(2) 個性的特質を失わない統一 そうした「住居-都市」としての「建築」の目指すべき状態がこれである。生活の多様性に接した生い立ちを背景に、卒業論文で小田内通敏『風土日本の研究基準』（1938）からの引用

文として現れ、終戦前後の思想と行動の中で生まれ、「不連続統一体」において「独立を損なわずに統一を与えること」と表現された。

(3) 空間の心理的把握 「空間」が「住居-都市」の本質であるとし、そこに心理的で可変的な性格も含有させる。これは『住居学概論』で言語化され、住居から都市までをつなぐ心理的な「モデュロール」として、「有形学」中の「圏域論」によって法則化が企てられた。

(4) 自己の延長としての「物」 「住居-都市」の本質としては、目に見えない「空間」以外にもう一つ、目に見え、手で触ることのできる「物」を重視している。『住居学汎論』の冒頭で明確にされた思想である。今和次郎の考え方の継承的発展とみなせる。留学中に「住居学」という言葉で意識されたのがこれである。「物」は「私」の延長であり、住居も都市もその構成要素だとされる。したがって、各人が「私」であり続けるためには、個我の投影である都市に(2)の性質が不可欠となる。その手助けとして(3)と(4)の法則化が企てられた。形の意味を追及する「有形学」の側面が、後者にあたる。

(5) 人間と環境の往還 卒業論文で強調されているのは、自然環境が人間に影響を与え、人間が物を製作することで自然環境に影響を与えて「住居-都市」といった人工環境を成立させ、人工環境が再び人に影響を与えるという往還関係である。この立場は後に、自然環境と人間の関係を扱う地理学や環境学に対して、人工環境と人間の関係を扱う「有形学」と規定される。

(6) 建築家の立場の自覚 「住居学」にしても「有形学」にしても、法則（理論）と創造（実践）が別物であることを前提に、前者を後者に適用し、人間と環境の往還関係に介入することが目されている。「住居-都市」をつくる「建築家の立場」は、卒業論文以降、どれほど理論に走った論考に見える場合でも自覚されている。

(7) 「原始」としての建築家 では、「私」ではない「建築家」がどうやって他人と環境の往還関係に介入できるのか。(3)や(4)の法則化は手助けになりえるが、成功が100%保証された創造などありえない。留学前の吉阪が自らに欠如しているとみていたのは、未来に賭けて提案する勇氣であり、初対面の直感の通りに、それをル・コルビュジエから会得して帰国した。学んだのは、俯瞰的な玄人として振る舞うことではなく、常識に束縛されない素人として周囲の環境を見つめ、「発明」によって能動的に働きかける姿勢である。卒業論文以来の原始住居と技術への関心や「住居学」の視点に自信を持ったともいえる。「不連続統一体」の組織論であるグループ設計にしても「原始」であり続けるための方法論だった。だからこそ、住居や都市といった本質的に「他人」の領域で、現在も考察に値する成果が生まれたのである。<注>

- 1) ル・コルビュジエに関しては、吉阪隆正「アテネ憲章の推進力となったル・コルビュジエの働き」（ル・コルビュジエ『アテネ憲章』, 1976, 『吉阪隆正集8』所収）において、『La Ville Radieuse』（輝く都市, 1935）を学生の頃に入手し、既成概念を打ち破る図と詩的な文章に魅了されたと言っている。
- 2) 1940年7月28日-8月4日の期間については調査野帳が吉阪家資料に残る。
- 3) 関連するものとして、参考文献10の他、佐藤武夫・武基雄・長谷川常次・秀島乾「北支に於ける邦人規格住宅の計画基準及び基準案」（建築学会論文集, 1944.4）, 「早稲田大学大東亜建築研究会」（吉田享二・佐藤武夫・十代田三郎他）による「南方邦人住宅設計指針」（1943.8）などがある。
- 4) 確認できた留学以前の日記は6冊で、記入時期はおおよそ1945年12月20日-1946年7月9日, 1947年1月1日-10月1日, 1948年3月21日-6月18日・8月1日-12日・10月1日-4日, 1949年2月1日-5日・8月6日-15日, 1950年1月16日。
- 5) 1946年に使用されたノートに石川栄耀「皇国都市の建設」（1944）の盛り場論やフランスの戦後復興計画などが抜粋されており、計画にあたって参照したと思われる。
- 6) 第二次世界大戦中に仮設住宅として開発されたQuonset Hut自体への関心は一般社会にも建築界にも広く見られ、例えば秀島乾は日本の実情に合った「キャンプ・ハウス」を試作している（『新建築』1948年9月号）。
- 7) 「Social Ecology Note」（吉阪家資料）に1947年以降の社会生物学関連の抜き書きがなされている。他のノートには1948年5月14日に都市社会学者・奥井復太郎が行なった講演「都市計画と社会経済学」の詳細な記録が見出せる。日記における「土地経済を読む。経済学としての問題から都市計画や建築への結びつきを考えながら」（1948年4月17日）, 「久保と話す。理論と実践をいかに結びつけるか。建築の場合それは何によるのか。建築に理論があるのか、などと。彼は湯川氏を、我は高田（社会経済学者の高田保馬と推定される：引用者注）氏をあげて共鳴する」（1949年2月1日）といった記述もこれに関連する。
- 8) 最も古い執筆メモは1950年5月23日である。6月の給費留学生応募・決定によって執筆が急がれ、渡航1週間前の8月15日（自序）に完成を見た。
- 9) 留学中の野帳によれば、1951年4月25日には文化省による連続講演会「L'habitation des populations urbaines」の一環で、吉阪が「De la tradition au modernisme dans l'habitation au Japon」と題した講演を行っている。
- 10) マルセイユのユニテの部屋配置、子供室室内の色名入りのスケッチなどを記入した手帳が見られる。
- 7) 吉阪隆正：新しい出発点に立って一文明論的視点での思索、現代建築の再構築、彰国社、1978.12, 『吉阪隆正集9』所収
- 8) 吉阪隆正：建築・探検・廃墟、世界考古学大系第10巻月報2, 平凡社, 1959.1, 『吉阪隆正集16』所収
- 9) 吉阪隆正：旅・人・形姿、都市計画委員会講演記録, 日本建築学会, 1973, 『吉阪隆正集16』所収
- 10) 佐藤武夫：北支に於ける邦人住宅問題の瞥見, 建築雑誌, 1941.9
- 11) 越澤明：満州国の首都計画, 筑摩書房, 2002.7 (1988.12), p.232
- 12) 吉阪隆正：秀島さんの子供達, 秀島乾君をしのんで, 私家版, 1973.12
- 13) 吉阪家資料
- 14) 吉阪隆正：北支蒙疆に於ける住居の地理学的考察, 生原稿, 1940.10, 『吉阪隆正集1』所収
- 15) 吉阪隆正：北千島学術調査隊建築調査報告, 建築雑誌, 1942.1, 『吉阪隆正集14』所収
- 16) 吉阪隆正：自然環境と住居の形態, 探検, 1942, 『吉阪隆正集1』所収
- 17) 本多昭一：近代日本建築運動史, 松井昭光監修, ドメス出版, 2003.5
- 18) 吉阪隆正：今後の建築教育, 計画-建築文化の基本的問題, 日本建築文化聯盟編輯, 相模書房, 1947.11
- 19) 吉阪隆正, 平井進：武蔵野町住宅調査に基づく家族構成と住居の型について, 学術講演梗概集計画系, 日本建築学会, 1947.11
- 20) 吉阪隆正, 大林新：「住宅改善会資料 共同住宅の家具の面積及容積比率について」, 吉阪家資料
- 21) 高山英華, 吉阪隆正ほか：戸山ハイソ批判座談会, 新建築, 1949.6
- 22) 吉阪隆正：泥の家, 生原稿, 1945.12.10, 吉阪家資料
- 23) 吉阪隆正：新構想の住居一かまぼこ兵舎解説, 建築文化, 1946.6, 『吉阪隆正集2』所収
- 24) 佐藤洋一：図説占領下の東京, 河出書房新社, 2006.7
- 25) 吉阪隆正：積雪学への提案（一）, 雪氷, 1946.7, 『吉阪隆正集14』所収
- 26) 吉阪隆正：住居学概論, 日本女子大学家政学部通信講座, 1949.5-9
- 27) 吉阪隆正：住居学汎論, 相模書房, 1950.10, 『吉阪隆正集1』所収
- 28) 吉阪隆正：研究計画書, 荒井勝祥「解説2 吉阪隆正とル・コルビュジエ」, 『吉阪隆正集8』所収
- 29) 吉阪隆正：建築様式のゆくえ, 新建築, 1978.4, 『吉阪隆正集6』所収
- 30) 吉阪隆正：書簡, 1950.12.4, 吉阪家資料
- 31) 吉阪隆正：書簡, 1951.1.20, 吉阪家資料
- 32) 吉阪隆正：書簡, 1951.3.7, 吉阪家資料
- 33) 吉阪隆正：書簡, 1951.3.16, 吉阪家資料
- 34) 吉阪隆正：書簡, 1951.9.24, 吉阪家資料
- 35) 吉阪隆正：書簡, 1952.4.5, 吉阪家資料
- 36) 吉阪隆正：書簡, 1950.9.30, 吉阪家資料
- 37) 吉阪隆正：書簡, 1951.2.13, 吉阪家資料
- 38) 吉阪隆正：書簡, 1951.5.8, 吉阪家資料
- 39) 吉阪隆正：書簡, 1951.10.7, 吉阪家資料
- 40) 吉阪隆正：書簡, 1950.8.28, 吉阪家資料
- 41) 吉阪隆正：書簡, 1951.5.8・1952.6.4, 吉阪家資料
- 42) 吉阪隆正：書簡, 1951.3.28, 吉阪家資料
- 43) 吉阪隆正：書簡, 1951.10.23・1952.2.6, 吉阪家資料
- 44) 吉阪隆正：書簡, 1951.1.9, 吉阪家資料
- 45) 吉阪隆正：不連続統一の提案, 建築文化, 1957.8, 『吉阪隆正集11』所収
- 46) 吉阪隆正：有形学へのアプローチI, 国際建築, 1964.3, 『吉阪隆正集13』所収

<参考文献>

- 1) 地井昭夫：吉阪の想望と現代住居学の課題, 吉阪隆正集1, 勁草書房, 1984.4
- 2) 重村力：環境・生活・形姿という構図, 吉阪隆正集5, 勁草書房, 1986.8
- 3) 齊藤祐子：吉阪隆正の方法, 住まいの図書館出版局, 1994.12
- 4) 倉方俊輔：吉阪隆正とル・コルビュジエ, 王国社, 2005.9
- 5) 吉阪隆正：大学と国際交流一個人的体験を通じて, 早稲田フォーラムNo.23, 早稲田大学出版部, 1978.11
- 6) 吉阪昭治：兄「タカ」のこと, 吉阪隆正集6月報, 勁草書房, 1986.9